

運動部活動からの離脱意図に影響する動機づけプロセスの検討

著者	藤田 勉, 森口 哲史, 松永 郁男
雑誌名	鹿児島大学教育学部研究紀要. 人文・社会科学編
巻	60
ページ	289-297
別言語のタイトル	An Examination of Motivational Processes that Influence Dropping out from Youth Sport
URL	http://hdl.handle.net/10232/8790

運動部活動からの離脱意図に影響する動機づけプロセスの検討

藤田 勉*・森口 哲史*・松永 郁男**

(2008年10月30日 受理)

An Examination of Motivational Processes that Influence Dropping out from Youth Sport

FUJITA Tsutomu・MORIGUCHI Tetsushi・MATSUNAGA Ikuo

要約

本研究の目的は、動機づけの自己決定理論 (Deci & Ryan, 1985, 1991, 2000) に基づき、運動部活動からの離脱意図に影響する動機づけプロセスを検討するために、自律性への欲求が内発的・外発的・非動機づけを媒介して離脱意図に影響するモデルと各動機づけの組み合わせで構成された動機づけプロフィールによる離脱意図の差の検討をすることであった。研究の方法は、運動部活動に参加する中学2年生273名(男子164名, 女子109名)と高校2年生298名(男子182名, 女子116名)の合計571名(男子346名, 女子225名)を対象とした質問紙調査であった。質問紙を構成した自律性への欲求尺度と動機づけ尺度については、構成概念妥当性の検討として探索的因子分析及び検証的因子分析を行った。その後、「自律性への欲求→各動機づけ→離脱意図」という因果モデルの検討を構造方程式モデリングによって行った。また、各動機づけの組み合わせで構成された動機づけプロフィールによって離脱意図の差を検討した。

キーワード： 自己決定理論, 心理的欲求, 動機づけ, スポーツ, 体育

* 鹿児島大学教育学部 講師

** 鹿児島大学教育学部 教授

緒言

運動部活動は自発的に取り組む活動であるにも関わらず、在学中あるいは卒業後にスポーツから離脱していく生徒は少なくない。運動部活動からの離脱あるいはスポーツドロップアウトを問題とする研究は、わが国では、青木(1989)、稲地・千駄(1992)、横田(2002)などによって、海外では、Butcher et al.(2002)、Pelletier et al.(2001)、Sarrazin et al.(2002)などによって行われており、世界的に重要度が高いといえる。部活動の意義は学習指導要領(文部科学省,2008)にも明記されるようになったが、運動部活動がより意義ある課外活動になっていくためには、運動部活動への参加がスポーツからの離脱のきっかけになるのではなく、豊かなスポーツライフの実現に向けた基盤を形成するものになることが望ましいだろう。そこで本研究では、運動部活動からの離脱のメカニズムを動機づけの観点から検討し、離脱を防ぐための指導に関する知見の提示を試みる。

自己決定理論(Deci & Ryan, 1985, 1991, 2000, 2002)は、スポーツからの離脱のメカニズムを解明する有力な動機づけ理論として考えられており、近年、盛んに実証的研究が展開されている(例えば、藤田・杉原, 2007; Pelletier et al., 2001; Sarrazin et al., 2002)。自己決定理論では、自律性(自らが行動の原因であるという感覚、自己原因性の感覚)の程度により動機づけが分類され、内発的動機づけ、外発的動機づけ、非動機づけという全てのタイプの動機づけによって行動が規定されると仮定する。

スポーツに関する多様な動機づけのうち、スポーツをすること自体が目的となっているのが内発的動機づけと呼ばれ、最も自律性の高い動機づけであるとされている。一方、スポーツをすることが目的獲得のための手段とするのが外発的動機づけと呼ばれている。しかしながら、外発的動機づけはさらに細分化されている。同一化的調整はスポーツをすること自体が目的ではないものの、健康増進や体型維持のために取り組む動機づけであり、外発的動機づけの中では自律性の程度が高いとされている。取り入れ的調整は恥をかかないためあるいは自尊心を保つために取り組む動機づけである。外的調整は他者からの強制によって取り組む動機づけである。取り入れ的調整と外的調整については自律性の程度は低いとされている。そして、非動機づけはスポーツに参加してはいるものの、上達することが見込めず、スポーツをすることに価値を見出せなくなっている動機づけであり、最も自律性が低いとされている。

Vallerand(1997)は、認知的評価理論(Deci & Ryan, 1985)の知見を応用し、動機づけにおける社会的要因の影響を心理的欲求が媒介することをモデル化している。藤田・杉原(2007)は大学生と高等専門学校生を対象として、Vallerand(1997)のモデルを検討したが、中学生や高校生を対象として研究はなされていない。そこで本研究第1の目的は、中学校と高等学校における運動部活動の文脈において、自律性への欲求から各動機づけを媒介して離脱意図に影響するプロセスを検討することである。また、Vallerand & Fortier(1998)は、内発的動機づけと同一化的調整、

あるいは外的調整と非動機づけのように、隣接する動機づけ間には相関があるとしている。例えば、内発的動機づけが高ければ同一化調整も高い傾向がある。また、内発的動機づけと取り入れ調整、あるいは外的調整のように概念的に隣接しない動機づけ間には相関がないとされている。これは、無相関である2つの動機づけの組み合わせによって、2つの動機づけが高い人、2つの動機づけが低い人、どちらかの動機づけだけが低い人という4つの動機づけプロフィールが構成されることを意味する。藤田・杉原(2007)は、内発的動機づけと非動機づけが離脱意図に影響する動機づけであることを明らかにしたが、これらの動機づけに外発的動機づけが組み合わさった場合の検討はなされていない。外発的動機づけの考え方を見直すためには、それが具体的にどのようなことなのかを明らかにし、外発的動機づけの役割に関する知見を増やしていく必要があると考える。そこで本研究第2の目的は、運動部活動において内発的動機づけあるいは非動機づけと無相関になる外発的動機づけの組み合わせで構成された動機づけプロフィールによって離脱意図の差を検討することである。

方法

調査対象と調査方法

研究の方法は、運動部活動に参加している中学2年生273名(男子164名、女子109名)と高校2年生298名(男子182名、女子116名)の合計571名(男子346名、女子225名)を対象とした質問紙調査法であった。調査を依頼した学校へは電話あるいは文書にて本研究の趣旨を説明し、調査票は調査協力の承諾が得られた後に直接持参あるいは郵送し、各学校の先生から生徒へ渡された。生徒たちの回答が終了した後の調査票は各学校の先生によって取りまとめられ、郵送にて返送された。

質問項目

自律性への欲求を測定する項目については、Vlachopoulos & Michailidou (2006)が開発した心理的欲求尺度の中から自律性への欲求尺度に相当する項目を参考にして作成した。動機づけを測定する項目については、Pelletier et al. (1995)のSport Motivation Scale (SMS)を参考に中学生と高校生に対応する表現になるよう作成した。離脱意図を測定する項目は、「中学(高校)を卒業したら、スポーツはやめて他のことに時間を使おうと思う」とした。全ての項目への回答方法は、「全く当てはまらない(1)」から「非常によく当てはまる(7)」の7段階による評定尺度法とした。

統計解析

質問項目の分析として、探索的因子分析を行い、その後、検証的因子分析を行った。また、自律性への欲求から各動機づけを媒介して離脱意図に影響するプロセスを検討するために構造方

程式モデリングを行った。そして、動機づけプロフィールによる離脱意図の差の検討には、一要因分散分析を行った。これらの統計解析を行うソフトとして、探索的因子分析、尺度の信頼性の検討 (α 係数の算出)、記述統計(平均、標準偏差、歪度、尖度)の算出、一要因分散分析には、Windows版 SPSS12.0を使用し、検証的因子分析及び構造方程式モデリングには、Windows版 AMOS5.0を使用した。検証的因子分析及び構造方程式モデリングについてはデータのモデルへの適合を評価する指標として、GFI, CFI, RMSEA を用いた。

結果

質問項目の分析

自律性への欲求を測定する項目については4問作成し、尺度の信頼性の検討として内的整合性を α 係数によって求めたところ、 $\alpha = .75$ という満足する水準であった。動機づけを測定する項目については、主因子法プロマックス回転による探索的因子分析を繰り返して行い、因子負荷量が、.40以上であり、内容的に解釈可能であることを基準として4因子を抽出した(表1)。

内発的動機づけ、同一化的調整、非動機づけのそれぞれの因子については想定された項目によっ

表1. 探索的因子分析の結果

因子名	項目	1	2	3	4
非動機づけ ($\alpha = .82$)	よく分からない。これ以上続けても上達するとは思えない。	0.83	0.09	0.03	-0.08
	よく分からない。もう、目標を達成できるとは思えない。	0.79	0.06	-0.03	-0.02
	よく分からない。もう、スポーツで成功するチャンスはないと思う。	0.65	-0.08	0.04	0.09
	よく分からない。最近ではスポーツをすることに価値を感じていない。	0.59	-0.13	0.04	0.03
内発的動機づけ ($\alpha = .81$)	スポーツをするときにしか味わえない強烈な感動を経験したいから。	0.10	0.76	-0.06	0.04
	スポーツでしか経験できない独自の楽しさを追求していききたいから。	0.03	0.75	-0.02	-0.06
	上達していくと、よりスポーツの奥深さを知ることができるから。	-0.05	0.72	-0.03	0.04
	苦手なことや弱点を克服して、上達していく感覚を経験したいから。	-0.13	0.61	0.16	0.02
取り入れ/外的調整 ($\alpha = .80$)	休んでしまうと、部の雰囲気になじめなくなりそうだから。	-0.09	-0.02	0.82	-0.02
	休んでしまうと、部員として認めてもらえなくなりそうだから。	0.02	-0.01	0.71	0.00
	休んでしまうと、他の部員に文句を言われそうだから。	0.08	-0.09	0.64	0.03
	能力が低下して、みっともない姿を他の部員に見られたくないから。	0.08	0.14	0.63	-0.01
同一化的調整 ($\alpha = .75$)	体型を維持する必要があるから。	0.06	-0.11	0.00	0.82
	健康な生活を送りたいから。	0.04	0.12	-0.04	0.75
	将来、役に立つことがあるかもしれないから。	-0.15	0.09	0.05	0.53

て構成されたが、取り入りの調整と外的調整については両者が1つにまとめられた形となった。本研究ではこの因子を取り入れ/外的調整として以降の分析を進めることにする。各尺度の信頼性の検討として内的整合性を α 係数によって求めたところ、内発的動機づけが $\alpha = .81$ 、同一化的調整が $\alpha = .75$ 、取り入りの・外的調整が $\alpha = .80$ 、非動機づけが $\alpha = .86$ という満足する水準

であった。その後、動機づけ尺度の構成概念妥当性を検討するため、検証的因子分析を行ったところ、GFI=.946, CFI=.947, RMSEA=.058 という良好なモデル適合度が示された。各尺度の平均値、標準偏差、歪度、尖度、相関行列は、表2に示した。

構造方程式モデリング

表2. 記述統計と相関行列

	平均値	標準偏差	歪度	尖度	1	2	3	4	5
1 自律性への欲求	17.87	3.78	-0.04	0.72	—				
2 内発的動機づけ	20.75	4.51	-0.49	0.67	0.45 **	—			
3 同一化的調整	14.30	3.90	-0.49	0.34	0.22 **	0.38 **	—		
4 取り入れ/外的調整	13.47	5.32	-0.03	-0.48	-0.20 **	-0.04	0.25 **	—	
5 非動機づけ	10.71	5.04	0.46	-0.36	-0.38 **	-0.41 **	-0.04	0.38 **	—
6 離脱意図	3.20	1.96	0.38	-0.97	-0.22 **	-0.29 **	-0.12 **	0.09 *	0.30 **

* p < .05

** p < .01

「自律性への欲求→各動機づけ→離脱意図」というモデルを構築し、構造方程式モデリングを行ったところ、GFI=.929, CFI=.931, RMSEA=.055 という良好なモデル適合度が示された。自律性への欲求から各動機づけへの影響については全て有意な値が示され、内発的動機づけ ($\beta = .54$) と同一化的調整 ($\beta = .24$) へ正の影響が、取り入れ/外的調整 ($\beta = -.23$) と非動機づけ ($\beta = -.45$) へ負の影響が示された。これは、自律性への欲求が高いほど、内発的動機づけや同一化的調整が高い傾向にあり、取り入れ/外的調整や非動機づけは低い傾向にあることを示しているが、同一化的調整や取り入れ/外的調整への影響指数は小さい値であることから、自律性への欲求からの影響力は弱いと考えられる。次に、各動機づけから離脱意図への影響について、内発的動機づけ ($\beta = -.22$) と非動機づけ ($\beta = .22$) から有意な影響が示された。これは、内発的動機づけが高いほど離脱意図が低い傾向にあり、非動機づけが高いほど離脱意図が高い傾向にあることを示しているが、離脱意図への影響指数は小さい値であることからこれらの動機づけからの影響力は弱いと考えられる。

動機づけプロフィールによる離脱意図の差の検討

相関行列を見ると、内発的動機づけと同一化的調整、取り入れ/外的調整と非動機づけには正の相関が示され、そして、内発的動機づけと取り入れ/外的調整、同一化的調整と非動機づけは無相関であった。これは、Vallerand & Fortier (1998) が論じている動機づけ間の相関関係とほぼ同様であった。そこで本研究では、無相関であった内発的動機づけと取り入れ/外的調整、同一

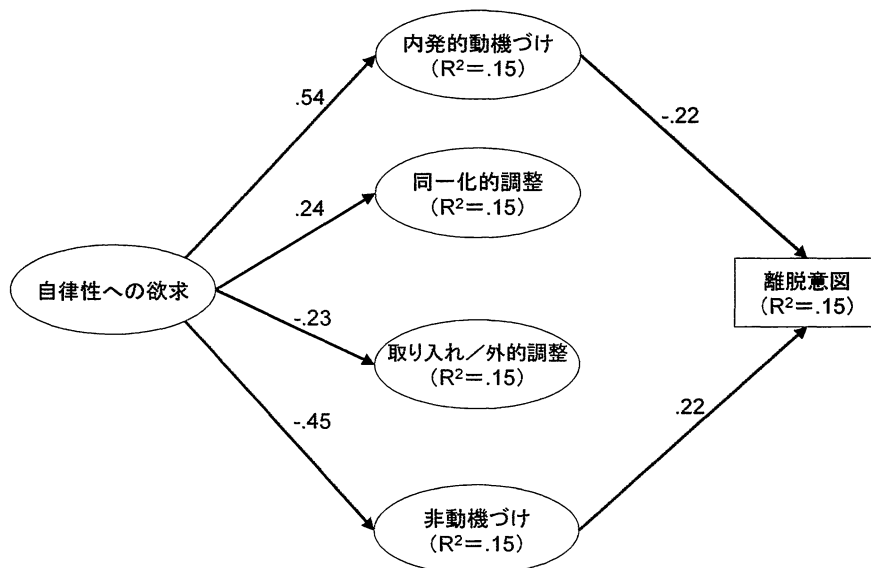


図1. 構造方程式モデリングの結果

化的調整と非動機づけの組み合わせによって動機づけプロフィールを構成し、各プロフィール間で離脱意図の差を検討した。内発的動機づけと取り入れ/外的調整の組み合わせでは、内発的動機づけと取り入れ/外的調整の両方が低い群（内発低・取外低群）、内発的動機づけが低く取り入れ/外的調整が高い群（内発低・取外高群）、内発的動機づけが高く取り入れ/外的調整が低い群（内発高・取外低群）、内発的動機づけと取り入れ/外的調整の両方が高い群（内発高・取外高群）という動機づけプロフィールを構成した。また、同一化的調整と非動機づけの組み合わせでは、同一化的調整と非動機づけの両方が低い群、同一化的調整が低く非動機づけが高い群、同一化的調整が高く非動機づけが低い群、同一化的調整と非動機づけの両方が高い群という動機づけプロフィールを構成した。

まず、内発的動機づけと取り入れ/外的調整の組み合わせで構成される動機づけプロフィール4群の離脱意図の差について一要因分散分析を行った結果、有意な主効果がみられた（表3、表4）。その後、多重比較（Bonferroni法）を行ったところ、内発低・取外低群及び内発低・取外高群と内発高・取外低群及び内発高・取外高群に有意差がみられ、内発低・取外低群及び内発低・取外高群の方が内発高・取外低群及び内発高・取外高群よりも離脱意図が高かった。

次に、同一化的調整と非動機づけの組み合わせで構成される動機づけプロフィール4群の離脱意図の差について一要因分散分析を行った結果、有意な主効果がみられた（表5、表6）。その後、多重比較（Bonferroni法）を行ったところ、同一低・非動高群及び同一高・非動高群と同一低・非動低群及び同一高・非動低群に有意差がみられ、同一低・非動高群及び同一高・非動高群の方が同一低・非動低群及び同一高・非動低群よりも離脱意図が高かった。

表3. 動機づけプロフィールによる離脱意図の得点（内発的動機づけと取り入れ/外的調整）

内発低・取外的低		内発低・取外高		内発高・取外低		内発高・取外高	
N=147		N=130		N=159		N=135	
M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
3.67	1.87	3.67	1.99	2.59	1.80	2.94	1.98

表4. 分散分析表（内発的動機づけと取り入れ/外的調整）

変動因	平方和	自由度	平均平方	F	
プロフィール	129.58	3.00	43.19	11.89	p < .01
誤差	2059.06	567.00	3.63		
全体	2188.64	570.00			

表5. 動機づけプロフィールによる離脱意図の得点（同一化的調整と非動機づけ）

同一低・非動低		同一低・非動高		同一高・非動低		同一高・非動高	
N=129		N=151		N=156		N=135	
M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
2.80	1.82	3.82	1.96	2.61	1.77	3.56	2.03

表6. 分散分析表（同一化的調整と非動機づけ）

変動因	平方和	自由度	平均平方	F	
プロフィール	151.34	3.00	50.45	14.04	p < .01
誤差	2037.29	567.00	3.59		
全体	2188.64	570.00			

考察

因子分析

動機づけを測定する項目について探索的因子分析を行ったところ、4因子からなる因子構造が最も解釈しやすかった。内発的動機づけ、同一化的調整、非動機づけについては、それぞれ想定された項目によって尺度が構成されたが、取り入れ/外的調整については取り入れ的調整と外的調整を想定して作成した項目が混在した尺度になった。相関行列をみると、取り入れ/外的調整と同一化的調整の相関係数は、.25であったのに対し、取り入れ/外的調整と非動機づけの相関係数は、.38であった。また、内発的動機づけと同一化的調整の相関係数は、.38であった。これらのことからすると、同一化的調整と取り入れ的/外的調整の相関が低く、この間にもうひとつの調整段階が想定される可能性があると考えられる。すなわち、本研究で作成した取り入れ的/外的調整は、むしろ、外的調整に相当すると考えられ、これとは区別された取り入れ的調整が想定されると考えられる。本研究では、Sport Motivation Scaleのような5因子からなる尺度にはならなかったが、今後、項目を再検討する、サンプルサイズを大きくするなどにより、妥当性の高

い尺度を作成していくことが課題として残される。

構造方程式モデリング

自律性への欲求から各動機づけへの影響について、内発的動機づけと同一化的調整へは正の影響が示され、取り入れ/外的調整と非動機づけへは負の影響が示された。これは、自律性への欲求が充足されることによって、内発的動機づけと同一化的調整が高まり、取り入れ/外的調整は低下することを示唆している。また、離脱意図への影響については、内発的動機づけから負の影響が示され、非動機づけから正の影響が示された。これは、内発的動機づけが高まることにより離脱意図は低下するが、非動機づけが高まることにより離脱意図も高まることを示唆している。これらのことを総括すると、自律性への欲求は内発的動機づけと非動機づけを媒介として離脱意図に影響するプロセスが考えられる。すなわち、中学校あるいは高校を卒業した後、スポーツをやめようと思っている生徒は、現時点での運動部活動に対する内発的動機づけが低く、非動機づけが高いことを意味しており、このような生徒は運動部活動を経験する中で自律性への欲求充足の程度が低く、自らが行動の原因であるという感覚が得られていないことを意味している。

動機づけプロフィールによる離脱意図の差の検討

内発的動機づけと取り入れ/外的調整の組み合わせで構成された動機づけプロフィールでは、内発低・取外高群及び内発低・取外低群が内発高・取外低群及び内発高・取外高群よりも離脱意図が高かった。これらのことからすると、取り入れ/外的調整の高低に関係なく、内発的動機づけの高低が離脱意図の高低に影響すると考えられる。しかしながら、取り入れ/外的調整は非動機づけと正の相関であることから、取り入れ/外的調整の高低は、むしろ、非動機づけの高低と関連があると考えられる。同一化的調整と非動機づけの組み合わせで構成された動機づけプロフィールでは、同一高・非動高群及び同一低・非動高群が同一高・非動低群及び同一低・非動低群よりも離脱意図が高かった。これらのことからすると、同一化的調整の高低に関係なく、非動機づけの高低が離脱意図の高低に影響すると考えられる。しかしながら、同一化的調整は内発的動機づけと正の相関であることから、同一化的調整の高低は内発的動機づけと関連があると考えられる。

これらのことと、構造方程式モデリングの結果を総合的に考察すると、離脱意図へ直接的に影響するのは内発的動機づけと非動機づけであり、同一化的調整と取り入れ/外的調整は、それぞれ隣接する動機づけと関連するが離脱意図には影響しないと考えられる。すなわち、運動部活動からの離脱に影響する動機づけプロセスは、自律性への欲求から内発的動機づけと非動機づけを媒介して離脱意図に影響するということになる。具体的には、自律性への欲求から、内発的動機づけへ正の影響が、非動機づけへ負の影響が示され、離脱意図へは、内発的動機づけから負の影響が、非動機づけから正の影響が示されるというプロセスになる。したがって、運動部活動から

の離脱を防ぐための指導を行うためには、内発的動機づけの低下と非動機づけの高まりを抑えることが必要となる。そのためには、自律性への欲求充足の程度を高めていくことが求められる。すなわち、生徒たちに自らが行動の原因であるという感覚を経験させてあげる指導が必要になると考えられる。

文献

- 青木邦雄 (1989). 高校運動部員の部活動継続と退部に影響する要因. 体育学研究, 34, 89-100.
- Butcher, J., Lindner, K.J., & Johns, D.P. (2002). Withdrawal from competitive youth sport: A retrospective ten-year study. *Journal of Sport Behavior*, 25, 145-163.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum Press.
- Deci, E.L., & Ryan, R.M. (1991). A motivational approach to self: Integration in personality. In R.A. Dienstbier (Ed.), *Nebraska symposium on motivation: Perspectives on motivation* (Vol.38, pp.237-288). Lincoln: University of Nebraska.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000). The 'what' and 'why' of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry*, 11, 227-268.
- 藤田勉・杉原隆 (2007). スポーツ文脈における心理的欲求と動機づけの関係. 学校教育学論集, 16, 81-94.
- 稲地裕昭・千駄忠至 (1992). 中学生の運動部活動における退部に関する研究～退部因子の抽出と退部予測尺度の作成. 体育学研究, 37, 55-68.
- 文部科学省 (2008). 中学校学習指導要領解説保健体育編.
- Pelletier, L.G., Fortier, M.S., Vallerand, R.J., & Briere, M. (2001). Associations among perceived autonomy support, from of self-regulation, and persistence: A prospective study. *Motivation and Emotion*, 25, 279-306.
- Sarrazin, P., Vallerand, R.J., Guillet, E., Pelletier, L., & Cury, F. (2002). Motivation and dropout in female handballers, a 21-month prospective study. *European Journal of Social Psychology*, 32, 395-418.
- Vallerand, R.J. (1997). Toward a hierarchical model of intrinsic and extrinsic motivation. In M.P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol.29, pp. 271-360). New York: Academic Press.
- Vallerand, R. J., & Fortier, M. S. (1998). Measures of intrinsic and extrinsic motivation in sport and physical activity: A review and critique. In Duda, J. L. (Ed.), *Advances in Sport and Exercise Psychology Measurement* (pp. 81-101). Morgantown, WV: Fitness Information Technology.
- Vlachopoulos, S.P., & Michailidou, S. (2006). Development and initial validation of a measure of autonomy, competence, and relatedness in exercise: the basic psychological needs in exercise scale. *Measurement in Physical Education and Exercise Science*, 10, 179-201.
- 横田匡俊 (2002). 運動部活動の継続及び中途退部にみる参加動機とバーンアウトスケールの変動. 体育学研究, 47, 427-437.